

第4問 (20点)

差異魔女工場では、工程の始点で投入した原料Aを加工して製品Cを生産している。標準原価計算制度を採用し、勘定記入の方法はシングル・プランによる。製品Cの標準原価カードは以下のとおりである。

直接材料費	100 円/kg × 1.5 kg	150 円
直接労務費	900 円/時間 × 0.6 時間	540 円
製造間接費	1,400 円/時間 × 0.6 時間	840 円
		<u>1,530 円</u>

次の〔資料〕にもとづき、各問に答えなさい。

〔資料〕

- 原料Aの実際消費価格は110円であり、当月における実際消費量1,750kgである。
- 直接労務費の当月実際発生額は649,770円であり、実際直接作業時間は735時間である。
- 製造間接費の当月実際発生額は1,014,500円であり、製造間接費は直接作業時間を基準に配賦しており、変動費率は600円/時間、月間基準操業度は740時間である。
- 製品Cの生産実績は次のとおりである。

月初仕掛品	300 個	(加工進捗度 50%)
当月投入	<u>1,150</u>	
合計	1,450 個	
月末仕掛品	<u>250</u>	(加工進捗度 60%)
当月完成品	<u>1,200 個</u>	

問1 当月における仕掛品勘定を作成しなさい。

問2 答案用紙に示された各差異の金額を答えなさい。ただし、製造間接費差異の分析は3分法を採用し、能率差異は変動費のみから算定すること。

第 5 問 (20 点)

当社は製品 B を製造し、製品原価の計算は累加法による工程別総合原価計算を採用している。次の〔資料〕にもとづいて、第 1 工程月末仕掛品の原料費と加工費、第 2 工程月末仕掛品の前工程費と加工費、第 2 工程完成品総合原価を計算しなさい。なお、原料投入額を完成品総合原価と月末仕掛品原価に配分する方法は、第 1 工程は平均法、第 2 工程は先入先出法を用いること。

第 1 工程の途中で発生する正常仕損品に処分価額はなく、この正常仕損の処理は度外視法による。第 2 工程の終点で発生する正常仕損品は 104,625 円の処分価額があり、第 2 工程の正常仕損品は完成品に負担させること。

〔資料〕

	第 1 工程	第 2 工程
月初仕掛品	300 個 (70%)	500 個 (75%)
当月投入	6,400	6,000
合計	6,700 個	6,500 個
正常仕損品	100	300
月末仕掛品	600 (40%)	800 (50%)
完成品	6,000 個	5,400 個

※ 原料はすべて第 1 工程の始点で投入し、() 内は加工費の進捗度である。

	第 1 工程	第 2 工程
月初仕掛品原価		
原料費 (前工程費)	168,000 円	630,000 円
加工費	121,800	202,500
小計	289,800 円	832,500 円
当月製造費用		
原料費 (前工程費)	3,462,000 円	(?) 円
加工費	4,121,400	3,120,125
小計	7,583,400 円	(?) 円
投入額合計	7,873,200 円	(?) 円

※ 上記〔資料〕の (?) は各自計算すること。